

# 日本人の言語行動

## —談話展開のためのストラテジー—

大 浜 るい子

### Repetition in Japanese Conversation

OHAMA, Ruiko

キーワード：繰り返し、物語、日本社会、話し手主導の談話展開

#### 0 はじめに

Watanabe (1993) や齋藤他 (1997) で、日本人は相手からの問いかけに「物語」の形で答える傾向にあることが指摘されている。ここでいう物語とは、問われたことに的確な一言で答えることと対比した答え方のことで、前史や周辺的な事情を併せて提示することをさしている。Watanabe (1993) ではアメリカ人たちが例えば「なぜ日本語を勉強しようと思ったのか」という問いに対して「日本に行きたかったから」とか「日本に興味を持ったから」と一言で答えたのに対し、日本人たちは例えば「父親がアメリカびいきで、彼自身留学した経験があり、子どもたちにも英語を勉強させたいと思っており、そのため小さい時からなんとなく知らず知らずの内に興味を持ち、英語を勉強するようになった」という物語を語って聞かせたことが紹介されている。

これらの相違点から、明快な英語と曖昧な日本語、あるいは論理的なアメリカ人と非論理的な日本人のような結論が導き出されることはさすがになくなってきた。明快さや曖昧さ、あるいは論理のあるなしは異なる体系内で組織されているものの間を比較するのではなく、それぞれの体系内で議論されなければならないものであるからである。しかし、このような視点を獲得しながらも、それぞれの社会に特徴的な個々の言語現象は、依然として孤立的に指摘されることが多く、その社会の他の言語現象と関連づけられながら一つの体系内で説明されることは少ないと言わざると得ない。

本研究では、日本人学生と留学生による異文化間の談話の分析を通して、日本人の「物語る」スタイルには、それに呼応する形の働きかけが用意されており、両者によって十全に談話展開がはかられてい

ることを示す。談話展開には、問いかけによって主導する聞き手主導の方策と物語によって主導する話し手主導の方策があると思われるが、どちらもその社会で協調的に振る舞うために発展してきた方策であろうというのが、この考察の結論である。

#### 1 分析資料の概要

ここで分析するのは、日本人学生と外国人留学生の間で交わされた13の談話である。留学生の出身地は、タイ、中国、インドネシア、韓国、香港、マレーシア、イスラエル、アメリカと様々であるが、ここでは一括して非日本語母語話者と位置づけている。談話参加者には、資料収集の目的を説明した後、自由に話をしてもらい、録音も自身で行ってもらった。1談話の参加者の規模は2名から5名、談話形態はインタビューに近いもの、一方的に話しているもの、同調的に発話が重なっていくものなど、様々である。ただ内容的には、日本人と留学生の多くが初対面、あるいはそれに近い関係であったため、互いの国の習慣や日本での生活、それぞれの専門領域に関することが中心になっている。参加者の年齢は20歳から25歳、女男の比率は日本人学生においては23対1、留学生においては10対5で圧倒的に女性が多い。留学生の日本語能力は中級から上級。談話収集地は東広島市、収集時期は1997年5月。以下で談話参加者を示すときは、日本人をJ1, J2, …と表し、留学生は出身地の頭文字 (T, C, I, K, H, M, Is, A) で示し、出身者が複数いる場合は番号をつけ区別した。

## 2 日本人の物語的応答

問いかげに「物語」の形で答えるというのは例1のようなのをいう。例2や例3の問いかげ(下線でその部分を示す)と答え(網掛けでその部分を示す)が1対1で対応しているのと比較すると、その違いは明らかであろう。

ところで、日本人は本当にこのように物語る傾向があるのだろうか。まずそれを明らかにするために、そしてその理由を明らかにするためにここでとった方法は、談話内の全発話を種類別に分類し、留学生と日本人学生の間でその出現傾向を比較するというものである。発話は大きく分けて、以下の4つに分類された。

**質問**：典型的には、文末に「か」を伴った文と疑問詞を伴った文である。しかし名詞一語のみの発話でも相手に尋ねていると思われるものはここに含めた。次の繰り返しと異なる点は、表現的にも内容的にも直前の相手の発話から独立していることが特徴である。

**繰り返し**：最も大きな特徴は直前の相手の発話を模倣したものであるという点である。完全なおうむ返しはもちろんのこと、部分的な言い替えを含むもの、あるいは表現的には全く異なるものの相手の発話から論理的必然的に導き出されるものもこれに分類した。

**あいづち**：うん、はい、ええ、ああそう等の他に、ほんと、へええ等も含めた

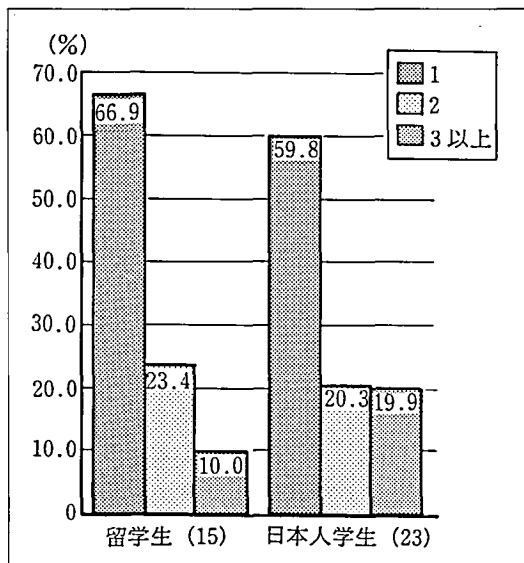
**主張**：主張は上述以外のものである。ここで主張というのは発話行為としてのそれではない。自らの考えや意見を述べているというもので、行為としては問いに対する答えや、忠告、約束、報告とさまざまである。

最初の3つは、相手に発話権を譲渡するための発

話である。そのうちの質問と繰り返しは譲渡するために一旦ターンをとるが、ターンをとらないで譲渡するのがあいづちである。そして、最後の主張は譲渡された、あるいは自ら獲得した発話権を行使する発話である。

日本人に物語る傾向があるかどうかということに関わるのは最後の主張である。表1は、1回のターンで話される情報量を比べたものである。情報量については、以下の基準により数え上げた。

(1)動詞1つあたりを1情報とする(例1の多くは、1網掛けが1情報になっている)。ただし、(2)従属関係にあると思われる場合(例1では「移動を考えたら」の部分)や、(3)副詞的に他の動詞を修飾しているように思われる場合(例1では「寝ぼけて」「ぼーっとして」は「座る」を修飾していると考えた)は、それらをまとめて1情報とした。(4)問いかげに対する答えなどで、動詞がなくても1情報としたものもある(例2の「4と7, 8」, 例3の「去年の10月から」など)。



グラフ1 留学生と日本人学生の情報量別のターン回数比較

表1 「主張」の際の1ターンあたりの情報量(個数)

発言者	情報量	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	
留学生15名		194	67	15	6	2	3	2			1											
日本人学生23名		147	50	20	10	6	3		3		1	2		2			1					1

(例1)

J 12 着付けをしてくれる人のところに行って、こうきちんとこう 着せてもらうとか もう  
J 13 美容院で  
K 1 ああ

J 12 すごいんですよ。だから私も成人式の時に 着物を着たんですけどもう朝早く起きて  
K 1 ああ

J 12 5時とかそれくらいに起きて だから  
J 13 いや、一人が着るのに すごくは  
K 1 ああ うん  
H 何時くらいかかるか? うん

J 12 そうそう だからもう一人に  
J 13 かからないけど、その美容院とかに お客さんが順番待ちで うん  
H ああ

J 12 かける時間が少ないからどんどんどんどん入れて、で、始まるのが9時とか10時だから  
H うん

J 12 移動を考えたなら早めに終わらないといけないじゃないですか。 だからもうどん  
H ああ、ああ

J 12 どんどん朝早く行って、もう寝ぼけて、こうぼーっとして、とりあえず座ってて  
K 1 ああ

J 12 もう全部こうやってくれて、でも「はい、立って」とか言う、もう全然何していいか

J 12 わかんなくて こう、着せてくれるんですよ。そんななんですよ。もう本当に。  
K 1 へえ

(例2)

J 18 今日の授業4コマだけなんですか?  
J 19 ああ7、8限  
A 2 うーん、4と7、8 2つ、後はない

J 18 えっ、週にどれくらい授業あるんですか?何コマ? 月曜日から金曜まで授業どの  
A 2 えっ?

J 18 くらいとってますか?  
J 19 あっそうなんですか、結構楽ですね。  
A 2 毎日2つくらい あはは(笑い)

(例3)

J 18 3年生です。 ええ、3年生 今年から広大に着いたんですか?  
J 19 3年生です。 同じです。  
A 2 今何年生ですか? 2人共?

J 18 ふーん、去年の10月か  
A 2 ああ、去年の10月から ここに1年しかいない短期留学だから

グラフ1は情報量別のターン回数の割合を、日本人と留学生で比較したものである。どちらにも情報量1のターンが圧倒的多数を占めるが、その傾向は留学生により顕著である。また、留学生は情報量が2から3以上と増えるに従い、ターン回数は急激に減少する。日本人学生では、情報量3以上のターン回数が情報量2と同程度あり、また情報量1のターン回数との差も小さい。概して日本人学生の方が一回のターンで提供する情報量が多いことが分かるだろう。さらに留学生の場合、情報量が3以上といっても10が最高値だったが、日本人学生の場合は10以上のものは7つもあり、最高値は20であった。

これらのことから、日本人学生が一度に多くの情報を物語る傾向にあることは分かったが、一体なぜ、彼らは物語を好むのであろうか。対話は常に相手との共同作業である。何が話され、どのように話されるかを考えるとき、対話相手からの働きかけというものを考慮しないわけにはいかない。日本人が物語を好むとすれば、そこには対話相手からの相応の働きかけがあるはずである。その働きかけの中に何らかの仕掛けが隠されているのではないだろうか。

### 3 ターン譲渡のための働きかけ

談話展開はターンの交代によって進められる。Sacks/Schegloff/Jefferson (1978) によれば、ターンの交代は移行適格場所と呼ばれるところで、次の方法のいずれかが繰り返し適用されることによって実現する。

- (1) 目下の話し手が次の話し手を指定する。
- (2) (1)が起らない場合、他の参加者のうち最初に話し始めた者が次の話し手になる。
- (3) (1)も(2)も起らない場合、目下の話し手がさら

に話し続けることができる。

物語を語る際の相手からの働きかけという点で問題になるのは、(1)の場合である。(1)を実現するためには、教室や裁判所など特殊な場面では「指名」や「命令」がありうるが、日常的な談話に見られる典型的なストラテジーは、問いかけである。我々の談話例でもほとんどが上昇イントネーションの問いかけであった。中には例4のように、言語形式だけを見ると、「問いかけ」と言うよりは「新しいテーマの提示」(その場合は、われわれの「質問、繰り返し、あいづち、主張」という4分類では「主張」に含まれる)、あるいは「あいづち」の一種である(同様にこの場合は「あいづち」に分類されることになる)と思えるものもあった。

しかし、ここではこれらもすべて問いかけとして扱った。理由は、以下の通りである。まず前者に関しては、問いかけである可能性を残していること、そして次の話者の発言がそれへの答えと解釈できる場合が多かったことである。後者に関しては、例中のJ12とJ13の発言が示すように、あいづちにしてしまうと問いかけとの区別が難しくなり、例えば確認をしているなどという可能性を排除してしまうことになるからである。そしてさらに重要なことは、大浜/山崎/永田(1997)で、日本人同士の談話(ある狭い談話タイプに限定されてはいるが)において、この例のような繰り返しは、ある種のあいづちや問いと機能上連続していることが指摘されていることである。形の異なるこれら3種の発話(問い、繰り返し、あいづち)が、日本人にとって機能上類似しているということは、我々の問題にとって示唆するところが多い。そのような事情があればなおさらのこと、形式上の違いは重要なので、ここではあえて言語形式に忠実な分類をした。

#### (例4)

H	卒業式が、参加することができなかつた。とっても残念です。		
J 12	ああ	ああ	さびしいなあ
J 13			ああ、じゃ
K 1			写真は?
H	写真はそのなにかこう撮ってないです。		
J 12		撮ってないんだ	じゃあ粋とか、こう
J 13		撮ってないんです?	

結果、ターンを譲渡するための問いかけ形式として、我々は質問と繰り返しという2種を区別することにした。例とともに示そう(例5, 6, 7参照)。

(1)質問：疑問詞を含む文(1a)と、独自の表現形式はないが上昇イントネーションによってyes-no質問(1b)と同意されたもの。

(2)繰り返し：直前の相手の発話の一部、あるいは全部を繰り返すもの。完全なおうむ返し(2a)もあれば、部分的に言い替えがなされるもの(2b)もある。また、表現は全く異なるものの、相手の発話内容から論理的必然的に導

き出されるもの(2c)もこれに含めた。

表2は日本人と留学生が使用した問いかけを質問と繰り返し別に集計し、個人別に表したものである。

これを見ると、問いかけ(質問と繰り返し)数は個人で大きなばらつきがあるが、これは相手にターンを譲渡するための発話数を数えただけなので、問いかけ数が少ないからと言って、それが直ちに会話への消極的な参加を意味するものではない。例えばJ9はそうである(他の3人の参加者の話を聞くにとどまっている)が、I3はそうではない(J24の多量の問いかけに答えることに専念している)。談話によってはインタビュー形式になったもの(I3とJ24、あるいはJ16とM2とA1による談話)、

(例5)

J20 あたしね あのね カタダにね留学するの カナダに えっとね7月か9月か  
M3 うん うん あ (1a) いつ?

J20 1年間 今年  
M3 (1b) 今年の? (2c) はあーいなくなるね

(例6)

M2 (1a) 後はここに来てなにを勉強しました?  
A1 んー、日本語だけ 彼の、ん、英語で  
J16 (2a) 日本語?

A1 教える授業も取った、前の学期で、前の学期に 英語で教える、  
J16 (2a) 英語で教えるの?

(例7)

H 何といたら、あっ私は初めのあの卒業生 うん もう卒業した  
J12 あっああ、(2b) あっじゃもう大学は卒業

表2 個人別に見た質問回数と繰り返し回数 <比:  $\frac{\text{質問}}{\text{繰り返し}}$ の値>

	J1	J2	J3	J4	J5	J6	J7	J8	J9	J10	J11	J12	J13	J14	J15	J16	J17	J18	J19	J20	J21	J22	J23	J24	計
質	9	7	1	0	1	1	3	2	1	0	16	6	3	2	13	11	3	1	8	23	5	2	0	38	156
繰	6	10	3	4	2	2	7	2	1	2	7	16	10	4	8	8	3	7	14	18	1	1	1	17	154
比	1.5	0.7	0.3	0	0.5	0.5	0.4	1.0	1.0	0	2.3	0.4	0.3	0.5	1.6	1.4	1.0	0.1	0.6	1.3	5.0	2.0	0	2.2	1.0

	T	C1	C2	I1	H	K1	I2	M1	M2	A1	Is	A2	M3	K2	I3	計
質	6	4	5	2	5	3	9	1	19	7	3	3	16	1	0	84
繰	5	3	6	0	5	4	5	4	4	4	1	1	10	2	0	54
比	1.2	1.3	0.8	∞	1.0	0.8	1.8	0.3	4.8	1.8	3.0	3.0	1.6	0.5	∞	1.6

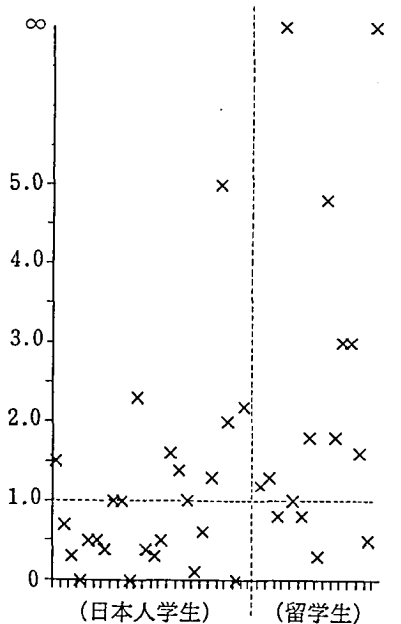
あるいは自分の話を一方的に聞かせるというもの（J 17と Is による談話）、また複数の参加者が一つの発話を共同で作上げていくという形を取るもの（J 12, J 13, H, K1による談話）など様々であり、問いかけの多少はこれらの談話形式と関係している。だから、日本人学生と留学生の一人当たりの平均問いかけ数（12.9対9.1）の違いはあまり意味を持たない。ここで両者の違いとして注目しなければならないのは質問と繰り返しのバランスである。日本人学生では繰り返し（154件）と質問（156件）がほぼ同数であったのに対し、留学生の方は質問（84件）が多く、繰り返し（54件）の1.6倍になっていることである。また個人別の傾向（表の最下段に質問／繰り返しの値を記した）を示したグラフ2を見ても、日本人では3分の2の学生が繰り返しの方を多用するのに対し、留学生では繰り返しを多用するのは3分の1にすぎない。残りの3分の2は質問の方をよく用いることがわかる。この結果より、日本人はターンの譲渡に際し、質問よりはむしろ繰り返しを好む傾向にあると言っていいだろう。

先に日本人は問いかけに対して「物語」で答える傾向にあることを確認した。そして今、日本人はその問いかけを質問ではなく繰り返しで行う傾向にあることが明らかになった。反対に留学生たちは端的に答える傾向があり、問いかけには質問を用いる傾

向が見られた。これは、談話展開という点から考えると、非常にうまく対応しているように思われる。というのも、談話が展開するためには、新情報の提供が必須である。新情報が何も提示されない（即ち、もう何も言うことがないということを示す）ことは会話の終了へのシグナルになるからである（Sacks/ Schegloff, 1973, 邦訳 p. 199f. 参照）。その新情報を導入するための仕組みが、「繰り返し」と「物語」、「質問」と「端的な答え」の組み合わせにおいて過不足なく整えられていると言えるからである。質問は次の話し手の発話内容を制限する。その意味で、質問は新情報の導入を主導していると言える。「端的な答え」はそれに従属しているのみである。一方、繰り返しは次の話し手の発話への関与というよりは、むしろ直前の相手の発話から制限を受けていると言うべきであろう。その限りでは、繰り返しは新情報導入に関わっていない。導入に関わるのは、「物語」の方である。前者を聞き手主導とすれば、後者は話し手主導である。この組み合わせが交替すると、談話展開上、不都合が起こりうる。例えば、「繰り返し」と「端的な答え」では、話は足踏み状態になり、談話は前に進まない。また、「質問」と「物語」では、提供させたい情報と提供される情報のくいちがいから焦点の定まらない談話になるだろう。日本人と留学生に見られたそれぞれの問いかけ形式とそれに対応する応答形式は、新情報の導入を混乱させることなく、談話進行をスムーズに促進させるべく、相補的に仕組みられていることが分かる。

#### 4 繰り返しの機能

ところで、これまでの議論では、新情報の導入を主導するのは質問のみで、繰り返しにはそのような機能は全くないと主張しているかのような印象を与えたかもしれない。しかし、日常的に体験するように、繰り返しは驚きを表したり、発話内容を確認したり、さらには発話意図の説明を求めたりするために用いられる。即ち、繰り返しは単に直前の発話から制限される消極的なものではなく、次の話し手の発話に影響を与え、新情報導入のきっかけを作りうる表現形式でもある。実際にはわれわれの談話において、繰り返しはどのように機能したのだろうか。以下では、繰り返しの直後に談話相手が返した応答の仕方から、日本人と留学生の用いた繰り返しには



グラフ2 個人別に見た問と繰り返しの実現比率

質的な違いがあったことを示したい。

繰り返し（例文内では、下線で示す）直後の応答（例文内では、網掛けで示す）には、以下の3タイプがあった。

- 1) 応答なし（例8参照）
- 2) 肯定表現（はい、そう、うん、など）と繰り返しによる応答（例9、10参照）
- 3) さらなる情報提供による応答（例11、12参照）

相手からの応答を必要としないタイプ1の繰り返しは、ほとんどあいづちに近い。このタイプを以下、「あいづち的繰り返し」と呼ぶ。タイプ2もあいづち的な側面があるが、応答表現が見られたことを重視し、「確認的繰り返し」と呼ぶ。但し、これは実

際に確認行為が行われたということではなく、確認行為である可能性があるという意味である。タイプ3の応答からは繰り返しが質問と受け取られたことが窺えるので「質問的繰り返し」と呼ぶ。新情報導入の可能性は、タイプ1が最も小さくタイプ3が最も大きい。

表3は日本人学生と留学生に見られた繰り返しのタイプ別出現数である。

この表を見ると、日本人の繰り返しは新情報の導入に結びつきにくく、反対に留学生の繰り返しは新情報を導入しやすいことが分かる。同じ繰り返しという手段でありながら、日本人と留学生では、その機能に違いが見られるというわけである。そしてこ

- 1) 応答なし：  
(例8)

J 24 ピンクの花で？  
J 3 はい、ピンクの花 ものすごく大好きピンクの花

J 24 ああピンクの花が？ えっ、去年は見ませんでしたか？  
I 3 あっ見ませんでした

- 2) 肯定表現（はい、そう、うん、など）と繰り返しによる応答：  
(例9)

C 2 何か出身地、何か、ど、ど、ど、どこ？ 長崎？  
J 7 私は長崎 うん、あ長崎、ん、ふんふん

- (例10)

H 私は、初めの、あの卒業生 うん もう卒業した  
J 12 あっあー、あっ、じゃあ、もう大学は卒業？

- 3) さらなる情報提供による応答：  
(例11)

C 2 で、広、広島？ しこ 徳島？ うん、知ってる知ってる  
J 9 四国の 徳島県 わかる？

- (例12)

J 2 1年生を勧誘するんだけど、 ね、  
J 1 あーどこも同じだよ。あーすごく目立ってるよ総科で

J 2 目立ってるよ。見たことある？ 行かない？最近  
J 1 そうそう総合科学部  
T ない、ない ソウカ？

表3 日本人学生と留学生に見られた繰り返しのタイプ別出現数

	あいづち的繰り返し	確認的繰り返し	質問的繰り返し
日本人学生	70 (45.5%)	70 (45.5%)	14 (9.1%)
留学生	12 (22.2%)	20 (37.0%)	22 (40.7%)

の違いは、日本人と留学生の間で見られた「繰り返し」と「質問」の使い分けに平行する現象である。日本人学生は、できるだけ新情報の導入を主導しないような問いかけ手段を選び、反対に留学生たちは、できるだけ新情報の導入を主導するような手段を用いていると言えるだろう。これら正反対の役割を与えられたそれぞれの聞き手には、自分からどんどん話を展開させる主導的な「物語る」話し手と、聞かれたことのみ「端的に答える」非主導の話し手が似合っている。

## 5 まとめ

以上見てきたことをまとめると、我々日本人は、対話相手に働きかけることを避けようとする傾向にあることが分かる。質問によって相手の言語活動をコントロールするのではなく、むしろ繰り返しという形をとることによって相手の言動活動を受け入れ、支持する傾向にあるからである。また、その繰り返しもどちらかと言えばあいづちに近いものとして使われていた。反対に留学生達は質問が多く、また繰り返しを用いる際にも機能的には質問に近いもので、談話展開を主導することが計られていることを見た。先に大浜/山崎/永田(1997)で、日本人の談話においては、質問と繰り返しとある種のあいづちが談話展開上同様の機能をもっていることが指摘されていることを挙げた。道開きという談話タイプに限定しての指摘だから、安易に一般化することは慎まなければならないが、次のような可能性が考えられる。すなわち、対話相手への働きかけを避ける傾向があるところでは、繰り返しや、更にあいづちまでもが十分な相手への働きかけになっているのではないかということである。だから、たとえば日本人にあいづちが多いのを、理解したことや同意していることを示さないと不安に陥る日本人という図式で説明するのは的外れに思える。同様に、繰り返しが多いというのも決して慎重なあまりに確認行為を重ねるのではないだろう。そうではなくて、質問の形式にするか繰り返しやあいづちの形式にするかは、それぞれの社会の規範を見据えた上での戦略の問題であり、個々の行為に、あるいはそれを行う者に人格的な評価をすることには慎重でなければならない。特に異文化間のコミュニケーションにおいてはマイナスの評価をしてしまうことが多いので、注意が必要なことはよく指摘される(生駒/志村(1993)

参照)。

しかし、そのような危険を冒さないようにすることがいかに難しいかは、そのことを問題にしながら、そしてマイナスの評価をしなくても、結局同じ間違いに陥ってしまっている次の例を見るとよくわかる。これは、ヤコブ・メイ(1993)に紹介されている西洋人の旅行者(メイ自身)と日本のある寺院の案内係の間で交わされた対話について、彼が考察を加えているものである。

旅行者：Is there a toilet around here?

案内係：You want to use?

旅行者：(somewhat astonished) Sure I do.

案内係：Go down the steps.

旅行者の文化ではこの案内係の反応はおよそ考えられず、決して起こりえないものなので、非常に驚いたことを告白しながらも、このような問いかけが意味をなす文化もあり、それぞれの社会の語用論的前提が異なることを指摘した上で、それらを考慮に入れた社会制度的語用論の必要性を説いている。その時、この案内係の行動を彼は以下のように解説している。「案内係がこの問いを発したのは、旅行者の質問はトイレに関する質問(中略)なのか、トイレに案内してほしいという(中略)ことなのかを確かめなかったからであろう。さらに考えられることは(こちらの方が信憑性が高いが)案内係は旅行者が和式のトイレか洋式のトイレかを尋ねていると思ったとも考えられる。こうした想定にたてば、もし旅行者自身がトイレを使用したいのであれば、彼はその質問が連れの日本人の友人のためになされた場合に返ってくる答えとは違った場所を教えてもらわなければならない。案内係は問い返し(「お使いになりたいのですか」)に対する答えを聞いてジレンマを解決し、それによってその旅行者にふさわしいと思われる場所、つまり「西洋式」トイレを教えたのである(邦訳 p.323)と。個々の行為が、文化によってそれぞれ異なる前提を持ち、また談話内の機能も異なる可能性があることに言及しながら、彼はこの日本人の案内係の行為を彼自身の文化の枠組みで解釈している。トイレを使うという目的以外にその場所を聞くことなどあり得ないことに気づきながら(日本人の場合もそれ以外にあり得ない)、この質問文が質問という行為であることを、すなわちなにか不明なことがあり相手から情報を求める行為



であるということを疑おうとはしない。だから東西のトイレット比較をしているとでも考えたのだろうかとか、使用者が外国人か日本人かわからなかったのだろうかと考えをめぐらすのである。そして引用の最後の文が示すように、理由を見つけて納得したとき、そこから「日本人の思慮深さ」や「細心の注意力」などの評価が出てきたとしても不思議ではない。しかし、日本人学生と留学生の談話を見てきた我々には、この案内係の行為は繰り返しの一種、すなわち直前の相手の発言から論理的必然的に導き出されることを言って、談話展開を主導しないようにただけあることがわかる。間違っても相手から情報を引き出そうとする質問行為などではない。案内係にとっていきなり「その階段を下りて行ってください」と言うのは、少しつっけんどんに思えるからで、談話展開の主導を相手にとらせる、あるいは先延ばしにただけである。いやそう言っても言い過ぎであろう。そのときの案内係にためらう気持ちがあったという必要さえない。このような展開が日本の社会でもっとも普通の展開形態だからにすぎないと言うだけで十分である。

なぜこのような形が普通になったかということは、ここで取り扱える範囲を超えている。

#### 付記：

本研究は平成8年度文部省科学研究基盤研究(B2)「地域の日本語教育活性化のための談話音声の研究」(研究代表者：今田滋子、課題番号08458056)の助成を受けて行われた。

## 引用文献

- 生駒知子, 志村昭彦 (1993): 「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー: 「断り」という発話行為について」『日本語教育』79号 41-52.
- Mey, Jacob L. (1993): *Pragmatics. An Introduction.* Oxford. Blackwell. 澤田治美, 高司正夫訳 (1996) 「ことばは世界とどうかかわるか」ひつじ書房.
- 大浜るい子, 山崎深雪, 永田良太 (1997): 「道開き談話におけるあいづちの機能」『日本語教育』96号掲載予定.
- Sacks, Harvey/ Schegloff, Emanuel A./ Jefferson, Gail (1974): A Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation *Language*, 50. 696-735.
- 斎藤みちる, 徐愛紅, 多田美有紀, 大浜るい子 (1997): 「談話分析から見た異文化間コミュニケーション -日本人の言語行動を中心に-」『広島大学日本語教育学科紀要』第7号 185-193.
- Schegloff, Emanuel/ Harvey, Sacks (1973): Opening up Closing, *Semiotica*, Vol.8, 289-382. 北沢裕, 西坂仰訳 (1989) 『日常性の解剖学』マルジェ社 177-241.
- Watanabe, Suwako (1993): Cultural Differences in Framing: American and Japanese Group Discussions. In: D.Tannen (ed.) *Framing in Discourse.* Oxford Uni. Press. 176-209.